

れんけい

第31号

平成28年6月
発行

地方独立行政法人
岐阜県総合医療センター
Gifu Prefectural General Medical Center
地域医療連携センター



慢性腎臓病と医療連携について思うこと

副院長兼腎臓内科部長 人工透析部長 内科主任医長
小田 寛

地域医療連携については諸先生方に平素より大変お世話になっており感謝申し上げます。慢性腎臓病（CKD）の患者数は現在わが国で1330万人と推定されていますが、人口の高齢化に伴いその数は今後も増えることが予想され、最近の腎臓病診療で感じている二、三のことについて書いてみます。

IgA腎症は慢性糸球体腎炎の中で最も多く、腎生検を受けた患者さんの30%程度を占めています。全年齢層で発症しますが、とくに10代～20代の若い人が多く、自覚症状は少なく健康診断で血尿や蛋白尿を指摘され受診される場合が多いです。症状は乏しいですが、長期予後は20年で40%が透析を必要とする慢性腎不全に進行するといわれており、決して予後良好の疾患ではありません。最近、IgA腎症は指定難病に追加されましたが、その確定診断には糸球体へのIgA沈着の証明が必要です。最近では扁桃摘出療法などの積極的治療をおこない寛解に至る例もあるなど治療成績も向上しつつあります。自覚症状がなく腎機能が正常でも、血尿、蛋白尿が続いている患者さんには一度受診をお勧めいた

なければ幸いです。

急速進行性糸球体腎炎は比較的まれですが、早期の診断と治療が必要な重篤な腎炎です。原因は感染症、膠原病、血管炎など様々ですが、最も多いのがANCA（抗好中球細胞質抗体）関連腎炎といわれる糸球体の小血管炎が原因の疾患で、高齢者が多く、感冒様症状や倦怠感が続くため医療機関を受診され、CRP上昇や検尿異常とくに血尿が強いのが特徴で、ANCAが陽性であれば診断確定となります。短期間で腎不全が進行するため、一刻も早い診断とステロイド、免疫抑制薬による治療が必要です。透析となる方も多く、疑わしい場合は早めにご紹介いただければと存じます。

現在わが国の透析患者数は32万人に達し、伸び率は一時より減ったものの毎年5000人程度ずつ増加しています。透析導入の原疾患としては糖尿病性腎症、糸球体腎炎、高血圧性腎硬化症が三大原因ですが、CKD患者さんでは心血管病を合併する比率が高いことが明らかになり、当院の循環器内科、心臓血管外科などとも協力しながら診療にあたっております。当院で加療して病状が安定したCKD患者さんは諸先生方との連携によるフォローが欠かせず、今後ともご協力をお願い申し上げます。

連携医の紹介

新加納内科

院長 今尾 泰一郎 副院長 今尾 泰之



当院は、各務原市那加新加納町（イオン各務原のすぐ近くです）に、父・泰一郎が昭和49年に開院しました。そこへ平成18年より私が加わり、現在は2人で診療を行っております。県総合医療センターへも近く、救急外来や病診連携を通して多くの患者様の診療をお願いしております。各診療科や病診連携室のスタッフの皆様にはいつも迅速、かつ丁寧な対応を頂き誠にありがとうございます。

私自身、県総合医療センターの前身である県立岐阜病院で多くの臨床経験を積ませて頂きました。救急外来ではしっかりとしたオンコール体制があり、各診療科同士の連携がとても良い病院であると感じておりました。当時、共に奮闘した仲間たちが各診療部で大活躍されているのを拝見し、とても心強く思います。

開業前には、夜間休日にも吐下血等に対する緊急内視鏡治療に明け暮れていた時期もありましたが、現在は家庭医として地域の皆様の健康管理をさせて頂

いております。診療所の守備範囲を超える疾患や精査の必要な患者様は、期を逸することなく病診連携を通して診療をお願いすることを心がけております。

ここ数年、日本人の病気や医療は大きく変化してきています。以前は最も多かった胃がんが減少傾向にあり、また、治療が大変困難であったC型肝炎は、発見から25年経て、高い治癒率の見込める時代へと革命的な変化を遂げました。当院でも内視鏡による早期胃がんの発見やピロリ菌の除菌に積極的に取り組んで参りました。また、肝炎や内視鏡の治療についても病診連携を通してお願いし、患者様にも大変喜んで頂いております。

最後に、開業以来、医師会の先生方はもちろん、多くの方々に支えられて診療を続けてこられましたことに感謝申し上げます。この地域からの胃がん・肝炎の撲滅、そして総合内科医として地域の皆様の良きホームドクターであることを当院の使命とし、これからも県総合医療センターとともに邁進したいと思っております。

名称 新加納内科
 医師 院長 今尾 泰一郎
 副院長 今尾 泰之
 住所 〒504-0958
 岐阜県各務原市那加新加納町1989
 TEL (058) 382-4969
 FAX (058) 389-0438
 診療科 内科 消化器内科
 診療時間 平日 午前8:30~12:00
 午後4:30~7:00
 土曜日 午前8:30~12:00
 受付時間 診療時間と同じ
 休診日 日曜、祝日、木曜日午後、土曜日午後
 駐車場 19台



診療科の紹介

小児療育内科

「すこやか」は重症心身障がい児を対象とした入所施設で、平成28年3月に当院に開設されました。

当施設では、寝たきりで人工呼吸器を必要とする重症心身障がい児を対象に治療とともに日常生活を安心、安全に過ごせることを目的としています。

以下のことを重点的に行っています。

①長期入院

センターが有する専門医療機能を活用し、他施設では入所が困難な医療的ケアを要する重度な障がい児の受け入れを行い、専門知識を有したスタッフに



「すこやか」では、病気の治療だけではなく、生活や教育といった場面もあります。

「すこやか」施設長 長澤 宏幸



より、高度な医療管理のもとで生活支援を実施しています。

②在宅移行

医療管理を理由にNICU・PICU等において入院が長期となっている障がい児が在宅に移行できるよう、その訓練の場として医療と生活の両面から障がい児と家族への支援を実施しています。

③レスパイトケア(短期入所)

在宅で重症心身障がい児を抱える家族等の精神的・身体的負担の軽減を図るためレスパイトケアを実施しています。

肝臓内科

肝臓内科部長 清水 省吾

肝臓内科では、消化器内科診療の一部として、主にウイルス性肝疾患、脂肪肝を含む代謝性肝疾患、肝臓の診断と治療(ラジオ波焼灼術や肝動脈化学塞栓術)などの診療にあたっています。杉原副院長、清水、永野ならびに消化器内科全医師で診療させていただき、肝疾患治療コーディネーターであるスタッフ8名がサポートしています。

C型肝炎では2014年9月より、治療効果が極めて高く、副作用の少ないインターフェロンフリー治療が保険適用となり、2016年3月までに当院では263名の方が治療をされています。その大半がかりつけの先生方からのご紹介です。この場をお借りして、お礼申し上げます。副作用で治療を断念されていた方・高齢者・腎障害や代償性肝硬変症例での治療も可能な時代になり、今後もより短期間の治療法の導入が見込まれています。また肝臓は減少傾向に転じていますが、非アルコール性脂肪性肝炎、アルコール性肝疾患を背景とした肝臓が増加しています。肝機能異常を伴う例ではその原因の検索を行い、肝機能検



査、肝臓マーカーや肝画像検査(特に血小板数低下を伴う肝線維化進展例)での定期フォローが重要です。ご紹介をいただいた患者様の検査等、またかりつけの先生方には定期フォローをお願いさせていただいております。今後とも先生方のご協力ご支援をよろしく願いいたします。

Topics

外来化学療法センターが新規オープンしました。

がん医療センター長
國枝 克行

手術、化学療法、放射線療法はがん治療の3本柱です。なかでもがん化学療法は新規抗がん剤の開発や副作用対策の進歩によりますます重要性が増し、治療を受けられる患者数が増加しています。

従来の化学療法は入院での治療が大部分でしたが、①外来でも可能な抗がん治療が開発されたこと、②白血球減少や嘔気などの副作用に対する支持療法が進歩したこと、③外来通院で化学療法を受けたいという患者さんの希望が増えたこと、④限られた医療経済状況の変化などにより、厚生労働省の政策誘導もあって外来主体に急速にシフトしてきました。

当センターでは10年前から外来化学療法を行っていますが、外来化学療法件数は年々増加し、2015年は年間4368件でした。

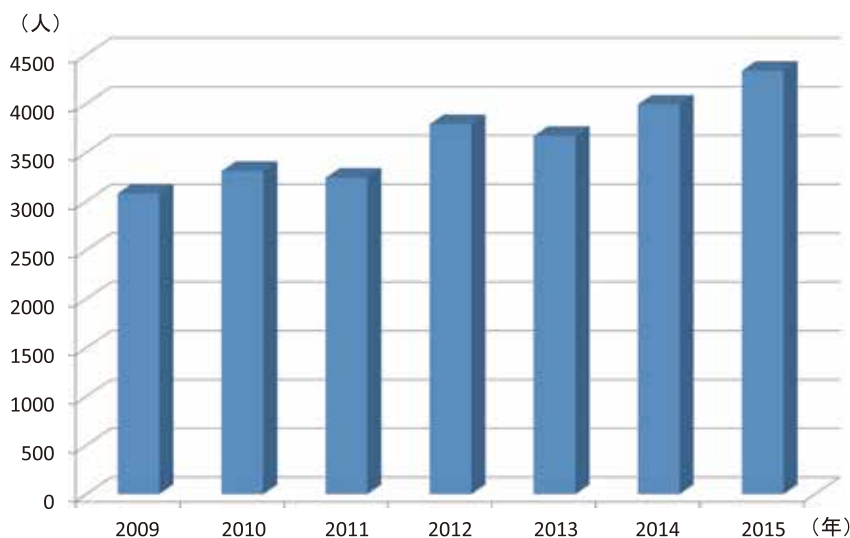
今年3月から外来化学療法センターが小児医療センター(すこやか棟)5階に20床でオープンしました。エレベーターですこやか棟5階にあがっていただくと、木目調の落ち着いた雰囲気を受付けが目に



入ります。外来の混雑とは別世界の静かな環境です。患者さんにはこれまで本館1階の狭い化学療法室で治療をうけていただきましたが、これからは明るく、ゆったりしたスペースの中で、快適に治療をうけていただけます。

多くの施設ではリクライニングチェアが主体ですが、当センターでは患者さんの希望をいれて、ベッド15床、リクライニングチェア5床とベッド主体の構成にしました。各ベッドには救急用の酸素、吸引器設備があり、テレビ、ビデオを楽しめます。また、隣のベッドとの間隔を充分離して、プライバシーに配慮した配置にし、完全個室も1床あります。化学療法センターには医師1名、看護師6-7名、薬剤師2-3名が常駐しており、薬剤の調整、確認、点滴、患者さんの状態観察を安全第一で行っています。

オープンして日も浅く、忙しく、緊張した毎日がつづいていますが、つらい治療中も患者さんにリラックスしていただき、患者さんとゆっくりお話ができる環境をめざしてスタッフ一同頑張っています。



外来化学療法件数の推移

これまで岐阜県総合医療センターでは、地域がん診療連携拠点病院として、緩和ケアチームや緩和ケア外来等の専門的な緩和ケアの質の向上と提供体制の整備を行ってきました。そこで本年4月より、がん医療センターの下部組織として新たに緩和ケアセンターを設立しました。今後、診療・相談・連携機能の強化に向けた取組みをより一層進めてゆく予定です。

ご存じのように、がんが疑われその検査を受ける時から緩和ケアは始まります。当院の緩和ケアセンターの活動をその流れに沿ってみますと次のようになります。診断や治療の根拠となるICに同席し、場合によってはがん患者カウンセリングを実施します。入院後はスクリーニングを行い、「生活のしやすさ」についてお聞きして、気持ちのつらさ、および、疼痛、呼吸困難感、倦怠感、嘔気などの身体症状の程度を把握します。そして、医師、看護師、薬剤師、臨床心理士、ソーシャルワーカー、栄養士などから構成される緩和ケアチームが、回診やカンファランス等の活動を通して患者さんが適切な専門的医療を受けられるようにサポートします。特に疼痛に関してはがん性疼痛クリニカルパスの導入を計画中で、迅速な疼痛緩和が可能となるシステムを目指しています。

他方、外来治療中の方に対しては、緩和ケア外



来を用意しています。がんに伴う不眠、不安、抑うつなどの症状に対しては精神科医師が担当しています。気持ちのつらさに関しては、患者さんだけでなくご家族も対象となる場合もあります。がんによる疼痛、嘔気、倦怠感などの身体症状、放射線・化学療法等の副作用に対しては内科・外科医師が診療する体制を整えています。特に本年4月からは外来枠を拡充し、月曜から金曜まで対応できるようにしております。病診連携等でご相談いただければと思います。

今後、患者さんや先生方のニーズに沿って、緩和ケアセンターの機能を発展させていきたいと考えております。病診連携、連携緩和カンファランス等を通してご意見をいただきましたら幸いです。よろしくお願いいたします。



病診連携緩和ケアカンファランス



緩和ケアチームカンファランス

チームの紹介

口腔機能管理部会

口腔ケアは以前から医療関係者の間では常識的な概念であり高齢者の肺炎の予防になることとして広く知られておりました。しかし過去において急性期疾患の術前術後に口腔ケアを励行していた施設はほとんどなく、口腔内は放置のまま急性期医療が公然と行われてきました。2012年より周術期口腔機能管理が保健診療として導入され、多くの施設で医科歯科連携、周術期口腔機能管理が始まりました。当センターでは関係者の自助努力により口腔ケアチームが結成され、院内ラウンド、口腔ケアに関する講習会などをおこない、院内スタッフの啓蒙活動を行ってきました。

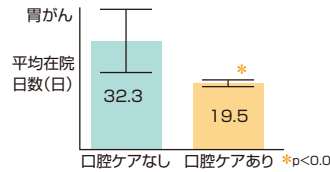
口腔ケアから口腔機能管理へ

周術期口腔機能管理とは、がん患者や心臓手術の周術期において歯科医師が包括的な口腔機能の管理を行うことであり、これによって、在院日数の減少、医療費抑制が現実のものとなり(図1、2)、科学的な検証が必要とされる課題になってきました。2016年、周術期口腔機能管理は増額改定され、現場の医療

口腔機能管理部会部長 石丸 純一

に着実に根付き始めております。これらの事象を踏まえ、2016年当センターでも口腔機能管理部会が新たに設立されました(写真1)。我々は従来の活動内容を踏襲しながらも、対象患者を拡大し、当センターにおける急性期医療のサポート・医療の質の向上に貢献したいと考えております。皆様のご理解ご協力の程お願い申し上げます。

(図1) 平成25年度胃がん患者の平均在院日数



(図2) 平成25年度胃がん患者の医療費

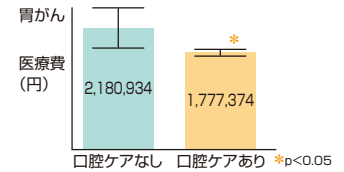


写真1

新しい取り組み

こどもたちの健康ための拠点「すこやか棟」が完成 小児医療センター長 桑原 尚志



岐阜県の小児医療の拠点となる建物が完成し、3月6日に竣工式が行われ、8日から運用が開始されました。中心的な施設は3階と4階の重症心身障がい児施設「すこやか」であり人工呼吸器を付けた重症心身障がい児のための医療型療養施設です。また2階には小児系診療科の外来がほとんどすべてあつまり、1階には障がい児のための小児療育内科・病気のこどもたちに必要な国内最高レベルの高性能CT(二管球)およびMRI(3T)・病気のこどもたちを預かる病児・病後児保育所「バンビ」等を設け、建物全体が主にこどもたちの健康を意識した内容となっています。5階のがん患者(全年齢)のための化学療法室を含め、この新棟全体の愛称を「すこやか棟」と命名しました。



主な機能

- [1階] 障がい児診察室、小児用CT・MR
- [2階] 小児系外来診察室(10室)
- [3階] 障がい児病棟(14床) ……「すこやか」
- [4階] 障がい児病棟(16床) ……「すこやか」
- [5階] 外来化学療法センター
- [6階] 管理部門

新任部長の挨拶・抱負



副院長兼看護部長 田垣 春美

認定看護管理者

平成28年4月より、副院長兼看護部長を拝命いたしました。地域包括ケアシステムのなかで、急性期病院としての看護師の役割を果たすことを大きな課題とし、平成28年度を踏み出しました。高度急性期医療を安全に提供するために看護の質を向上させ、入院・外来・地域と連携強化に取り組んでまいります。さらに、急性期の患者さんに寄り添い、その人らしい生活が、入院中にも住み慣れた地域でも送れるように支援ができる看護師の育成に努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。



放射線治療科部長 梶浦 雄一

日本医学放射線学会認定専門医
日本医学放射線学会研修指導者

4月より放射線治療科に赴任しました梶浦と申します。最近の放射線治療は高精度化によって、安全で高い効果が得られるようになってきました。当院でも近い将来に高精度の放射線治療ができる環境が整備される予定です。現在でも数多くの患者様も放射線治療を受けていただいておりますが、将来的に多くの方に今以上に高精度の治療が受けただけのような環境の構築に、今から取り組んでゆく予定です。どうぞよろしくお願いいたします。



不整脈科部長 廣瀬 武司

日本内科学会 認定内科医
日本循環器病学会 循環器専門医
日本不整脈心電学会 不整脈専門医
植え込み型除細動器/ペースメーカーによる心不全治療 研修証取得
岐阜県医師会心電図解析委員会 委員

近年、不整脈に対するカテーテル治療の進歩は目覚ましく、当院でも、年間200症例を超える不整脈カテーテル治療を施行しております。中でも以前は治らない病気であった心房細動は、現在、発作性心房細動であれば80%以上の治療率が期待出来る病気となりました。また、致死性不整脈、徐脈性不整脈に対するペースメーカー治療も積極的に行っており、東海地区有数の症例数を経験しております。これからも、患者さんにとってbestな治療を提供できるよう、スタッフ全員で努めて参ります。



高血圧科部長 小野 浩司

日本内科学会 認定内科医
日本循環器学会 循環器専門医

平成28年4月より高血圧科部長を拝命致しました。私は平成14年より当院に赴任し、虚血性心疾患や不整脈や弁膜症など循環器疾患一般の診療から救急医療などに従事してきました。血圧の管理は様々な疾患と関連があり、循環器領域のみでなく腎疾患や脳卒中など多くの患者さんにとって重要な問題です。今までに学んできた経験を活かして、ある専門に偏るのではなく広い視野を持って診療に当たるように努めてまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

地域医療連携センターからのお知らせ

平成27年度岐阜県総合医療センターオープン病床クリニカルミーティング開催いたしました



日時：平成28年2月25日(木)午後8時～9時35分
場所：岐阜県総合医療センター 情報交流棟3階 講堂

日頃は地域医療連携にご協力いただきまして誠にありがとうございます。寒い時期にも関わらず、登録医の先生を始め、訪問看護師、ケアマネージャー等多職種の皆様に多数ご出席していただき、院外75名、院内48名、総数123名と大盛況となりました。毎回、内容が盛りだくさんとなり、充分討論できないとのアンケート結果をもとに、症例は脳卒中連携パスを使用して、回復期から地域へつないだ一事例とさせていただきました。またトピックスとして、当センター副院長兼消化器内科部長より、C型肝炎に対するインターフェロンフリー治療についての講演もありました。今回のアンケート結果から、90%以上の方が知識を高めることができた。実践に役に立つ。地域連携パスについて一連の流れがわかりやすかった。インターフェロンフリー治療についてわかりやすかったが、資料があるとありがたかったなどの意見がありました。一方、もう少し早い時間が良い、21時までに終わってほしいといった意見もあり、今後も内容や時間について検討していく予定です。

紹介状なしでの初診にかかる費用を改定しました

当センターでは、4月の診療報酬改定に伴い、紹介状を持参されない場合に負担いただく初診に関する費用(保険外併用療養費)を5,400円に改定いたしました。

今般の改定により連携医療機関の先生方に対して、紹介状を希望される患者さんが増えることが想定されます。このことは、日頃の健康や病状の管理はかかりつけの医療機関で対応していただき、特別な検査、治療が必要となった際は当センター等へ紹介していただくという良い連携がより必要になると考えます。当センターにおいてもこれを期に逆紹介を一層推進してまいりますので、当センターを受診希望の患者さんへの紹介状作成についてご配慮いただきますようお願いいたします。



当センターのロゴマークが制定されました

◇目的

職員の連帯感の醸成と、患者さんにより一層親しみをもっていただくことを目的に、岐阜県総合医療センターのマークを制定しました。

◇コンセプト

岐阜県と総合(General)のイニシャル「G」をモチーフとしています。3つの円弧は「医療従事者」「患者」「地域の医療機関」との信頼関係を意味し、円が安全で良質な全人的医療の提供を象徴しています。橙色は医療に対する情熱、緑色は再生、薄青色は安全・安心、濃青は新しい医療の創造をイメージしています。



地方独立行政法人

岐阜県総合医療センター

Gifu Prefectural General Medical Center

編集後記

岐阜県総合医療センター地域医療連携広報誌 第31号をお届けします。病診連携に向けて、先生方に少しでもお役に立てる紙面を目指しています。ご意見、ご要望がございましたらお寄せください。お待ちしております。



地方独立行政法人

岐阜県総合医療センター

〒500-8717 岐阜市野一色4丁目6番1号

地域医療連携センター直通 TEL(058)249-0017

FAX(058)248-9334

発行/岐阜県総合医療センター地域医療連携センター